

### はじめに

今回は、本連載第16回から第22回<sup>\*1</sup>の「意匠の表現と認定」の補講として、最近の2件の裁判例を紹介し、動的意匠(変化する意匠)と自然物に関し検討する。

### I. 知財高判令和6・12・19 〔容器入り飲料〕

令和6(行ケ)10034

本願意匠「容器入り飲料」〔図1〕

(知財高等裁判所HP・裁判例要旨より)<sup>\*2</sup>

● 図1

斜視図



開蓋後の斜視図



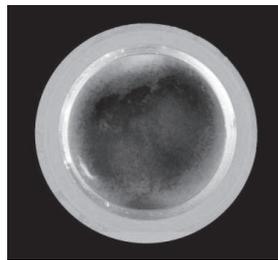
発泡後の状態を示す開蓋後の開口部拡大斜視図



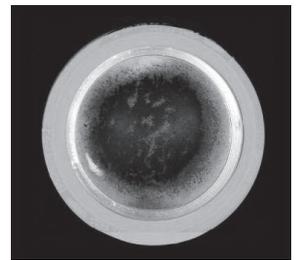
編集注:

本願は包装用缶をピンク色に着色し(本誌では薄墨色)、着色された部分以外の部分の形状等について、意匠登録を受けようとしている。

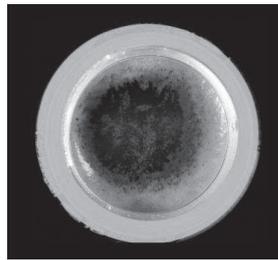
発泡状態の変化を示す  
開蓋後の平面図1



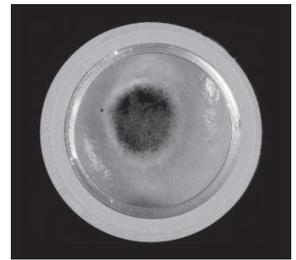
発泡状態の変化を示す  
開蓋後の平面図2



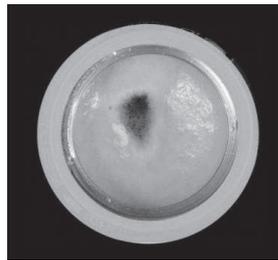
発泡状態の変化を示す  
開蓋後の平面図3



発泡状態の変化を示す  
開蓋後の平面図4



発泡状態の変化を示す  
開蓋後の平面図5



発泡状態の変化を示す  
開蓋後の平面図7



発泡状態の変化を示す  
開蓋後の平面図10

